

今回から3回にわたり、アメリカ南部人移民の植民地経験について見ていきたい。実際、ブラジル社会における彼らの位置づけは、さまざまな状況によって揺れ動き、それぞれの植民地での境遇は著しく多様であった。このような状況は、時に同胞間の軋轢やカトリック文化に対する抵抗を引き起こすこともあったが、彼らはそれらの障壁を乗り越え、着実にホスト社会に根付き、その歴史的痕跡を残していった。

ヴァーレ・ド・リベイラ地方

まず初めに、サンパウロ州南部に位置するヴァーレ・ド・リベイラ地方の南部人植民地について見ていきたい。同地方はリベイラ・デ・イグアッペ川の流域で知られており、その面積は2,830,666ヘクタールに及ぶ。その広大な土地のほとんどは密林で覆われており、南部人の植民地活動が始まった19世紀後半にはインディオ(先住民)の集落や「キロンボ(quilombo)」と呼ばれる逃亡奴隷の集落が多く点在していた。白人は大西洋に面したイグアッペ、カナネイア、パラナグアといった港町に集住していた。この中でも特にイグアッペは、ヴァーレ・ド・リベイラ地方の経済活動の中心で、米作農業が主流であったが、サトウキビやコーヒー栽培も盛んであった。そのため、同地は南部人の玄関口となり、彼らは港から小船に乗り、イグアッペ川を遡って辺境へと旅立った。同地には、1866年から1867年にかけて、フランク・マクマランの植民地やブラード・ダンの植民地、ジェームス・ガストンのシリリッカ植民地が築かれた。

ブラード・ダンの植民地

次に、ブラード・ダンの植民地について概観しよう。ダンはいリジアナ州ニュー・オーリンズ市の出身で、南北戦争以前は同市のセント・フィリップ教会の牧師であった。そして、戦時中は南部連合軍に所属し、戦争の終結とともに、南部の人々が混乱と困難に直面するなか、彼はブラジル移住を余儀なくされた。その後、彼は1865年に調査員としてブラジルに渡り、翌1866年にはその調査報告を*Brasil, the Home for Southerners; or, A Practical Account of What the Author, and Others, Who Visited That Country, for the Same Objects, Saw and Did While in That Empire*という書籍にまとめた。同書では、ブラジルの地理、環境、土壌などの自然条件や、ブラジル人の宗教や国民性といった社会文化的特徴、さらに奴隷制を基盤とした歴史的・政治的背景の中で行われる経済活動について記述されている。

彼はブラジルのエスピリトサント州とリオデジャネイロ州で最初の調査を行ったが、そこは地価が高く、かつ面積も小さかったため、サンパウロ州のヴァーレ・ド・リベイラ地方へ向かった。そこで、ジュキア市周辺の土地を見て、そこは値段も安く、土地の地質がエスピリトサント州やリオデジャネイロ州のものより優れていると考えたため、同地を購入することに決めたのである。そして、彼はジュキア市周辺に、妻のエリザベスの名を冠した「リジーランド(Lizzieland)」という植民地を1867年に築いた。植民地には150人の南部人が居住し、彼らは綿花、砂糖、タバコ、コーヒーの栽培に従事した。

しかし、彼らの植民地活動への意欲は次第に減退し、軌道に

乗ることはなかった。事実、リジーランドの土地が良好であるというダンの推測は、単なる思い込みに過ぎなかった。その土地は、実際には農業に適しておらず、雨が降ると土地の半分が浸水するという非生産的な土地であった。それゆえ、ダンは打開策として土地を担保に入れて4,000ドルの借金をし、新しい移民を迎えにアメリカへ帰ると言い残して植民地を後にするが、二度とその姿を見せることはなかった。その後、リーダーを失い、入植の夢を打ち砕かれてしまった南部人たちは、現地に適応できず、飢えに苦しみ、ほとんどは他の南部人植民地に向かった。こうして、リジーランドは終わりを迎えたのである。フランク・マクマランの植民地

続いて、フランク・マクマランの植民地に注目しよう。マクマランはダンと同様に、1865年に調査員としてブラジルに派遣され、現地で植民地活動の先鞭をつけた。そして、帰国後には地元のテキサス州でブラジル移住を斡旋し、それによって約140人が集まったと言われている。その後、彼は「ダービー」という名の移民船を借り、1866年1月24日にテキサス州ガルベトン港からブラジルに向けて出航した。船内では、マクマランが南部人にポルトガル語を教え、ブラジルへの旅は順調に進むかのように思われた。しかし、出航から数日後、メキシコ湾を航海中に嵐が発生し、状況は一変した。強風で船はキューバまで流され、真夜中に海岸沿いに並ぶ巨大な岩石に衝突し、浸水してしまった。南部人たちは浜辺に避難することができたが、荷物や食糧などが流されてしまい、悲惨な状況に置かれることとなった。

この状況下で、南部人に救いの手を差し伸べたのがキューバ人のヴェルネという人物であった。彼は島の奥地で難破船のことを聞きつけ、南部人の救助に駆けつけたのである。そして、南部人の体調や住環境を憂慮し、彼らを自身の大農園に招待して、敷地内の建物を宿舍として提供した。そこに彼らは1年以上にわたって滞在した。その間、ヴェルネは南部人に十分な食糧も提供したのである。他方、マクマランはキューバからブラジルに向かうための新しい船を求めて、首都ハバナへ向かうが、それを見つめることができなかった。そのため、彼はニューヨークに向かい、そこで南部人をハバナからニューヨークへ連れて行くための蒸気船を手配し、さらにニューヨークからブラジルへはユナイテッド・ステーツ・アンド・ブラジル・スチームシップ・カンパニーの定期船を手配することができた。そして、1867年3月10日、南部人はマリボザ号に乗船してニューヨークに向けてハバナを後にした。ニューヨークに到着後、南部人は数日間の休養をとり、同年の4月22日にノースアメリカ号に乗船して、リオデジャネイロに向けてニューヨーク港を出航した。この旅の続きは、次回で扱うことにする。

[参考文献]

Ballard S. Dunn. *Brasil, the Home for Southerners; or, A Practical Account of What the Author, and Others, Who Visited That Country, for the Same Objects, Saw and Did While in That Empire*. New Orleans: Bloomfield & Steel, 1866.

Frank P. Goldman. "Uma tentativa de colonização no litoral sul de São Paulo por imigrantes oriundos do sul dos Estados Unidos após a Guerra Civil", *Revista de História*, 14 (29), 1957, 3-20.